

# 鯉と雉

—『うつほ物語』の飲食表現—

室城秀之

『徒然草』に、次のような一節があります。

鯉の羹あじのを食ひたる日は、鬢びんそそけずとなん。膠にかはにも作るものなれば、粘りたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前ごぜんにても切らるるものなれば、やむことなき魚なれ。

鳥には、雉、双なきものなり。雉、松茸などは、御湯殿ごゆどのの上に懸かりたるも苦しからず。そのほかは、心憂きことなり。

(『徒然草』第二一八段、↓)

「鯉の羹」とは、鯉の熱い汁物のことで、諺の「羹に懲りて膾なますを吹く」の羹です。鯉は膠の材料にするほどの粘り気のある魚だから、鯉の羹を食べた日は、体に脂肪分がふえて、耳際の髪がほつれ乱れないというのです。「膠」といつても、あまり馴染みがないかもしれませんが、要するに、接着剤のようなもので、牛の皮を煮て作るから「にかは」というのだそうです。もつとも、鯉で膠を作るといふことはほかに見られないようで、久保田先生の新大系の脚注にも、「鯉で膠を作るとは不明」とあります。また、

鯉は、帝の御前で料理される唯一の魚だから、尊重すべきものだといひます。新大系の脚注には、『古今著聞集』に、崇徳天皇の御前で藤原家が鯉を料理した例が、『とはすがたり』に、後深草院の御前で隆弁僧正が鯉を料理した例があると指摘されています。兼好の言う鯉の特徴をまとめると、要するに、栄養価が高く、また、尊重すべき魚だということになります。

ここで、本山もとやま荻舟の『飲食事典』<sup>(2)</sup>の「鯉」の項を確認しておきたいと思ひます。

鯛を海魚の王というのに対し鯉は川魚の長といわれ、夏はアライに冬はナマスにコクシヨウ(鯉こく)は四時に適し、新鮮をたつとぶ意味では生作りという手法も行われ、産地の長野地方では押鮭・甘露煮・カマボコ・チクワ・薩摩揚・塩辛・鯉味噌・鯉スープと鯉づくめの加工品もあるが、本味はやはり冬の鮮魚でサシミにもナマスにも味噌を加えたのが調和する。……昔から鯉コクを食った日は鬢の毛がそそけないといわれ、また産婦に与えると、乳の出がよくなることは経験者の保証するところとなっている。

『飲食事典』にも、「鯉は川魚の長といわれ」ていること、つまり、尊重すべき魚だということと、「鯉コクを食った日は鬢の毛がそそけないといわれ、また産婦に与えると、乳の出がよくなること」、つまり、栄養価が高いことが説明されています。「昔から鯉コクを食った日は鬢の毛がそそけないといわれ」とありますが、このことは、『徒然草』以外には見えないよ

うで、『徒然草』の注釈書をいくつも見たのですが、その出典については何も説明がありません。『飲食事典』も、『徒然草』のこの記事によったようです。

『徒然草』には、もう一例、第三二一段に「鯉」のことが出ています。「園の別当入道」という料理の名人の話で、高等学校の古文の教科書にも時々採られている段なので、読んだことがある方もいることと思います。

ある人のもとで、すばらしい鯉が出された時、人々が、別当入道の腕前を見たいと思っていたところ、別当入道が、そんな人々の気持ちを察して、「百日間続けて鯉を料理する修行の最中なので、ぜひその鯉を料理させてほしい」と、みずから願って料理したので、人々がその如才ない振る舞いに感心したという話です。この後に、この別当の振る舞いへの北山の太政入道殿（藤原実兼）の批判や、兼好の感想も書かれています。それはそれとして、宴会などのパフォーマンスとして、鯉を料理することがあったこともわかります。

また、兼好は、雉を「双なきもの」と言っています。雉は、雁とは違って、中宮の台所の柵に、そのままの鳥の姿のまま置いておいてもかまわない、言わば、特別の高級食材だったようです。

ここでも、『飲食事典』の「雉」の項を確認しておきたいと思います。

キジの猟期は一月から二月一杯で、三月一日から一〇末までは捕獲禁止になっている。これは繁殖期が三月初旬からはじまるので、保護のためもある。

ると同時に極寒が美味なからでもある。暖国産のものには臭気が強けれど寒国産のものにはほとんどないと言われ、鴉鳥中の代表として古くから貴人の盛饌に上り、一般にも美味第一に推された。……俗説にキジは悪食をするから血を荒すとか、古傷を呼出すとかいうのも美味なために過食を戒めたものと解してよく、『食品国歌』には「雉の肉中温めて気をは増し、瀉利をとどめて瘻を除くぞ」とある。

『食品国歌』という書物は、大津賀仲安という人が天明七年（一七八七）に著した書物で、版本しかないそうで見えていないのですが、「雉の肉は、食べると体の中を温めて気力を増進し、瀉利（下痢）をとどめて瘻（腫れ物）を除く」と書かれているそうです。また、『四条流包丁書』には、「ただ鳥とばかり言ふは、雉子のことなり」ともあります。現在、「鳥肉」といえば、鶏のことですが、古くは、雉のことをいったのです。

このように、鯉と雉は、古典の世界において、最も珍重された料理食材でした。



川魚の代表として好んで食べられた鯉ですが、『源氏物語』には、「鯉」の語は一例も見えませんが、一方、『うつほ物語』には、後に見る、和歌での「恋」との掛詞の例を含めて、一四例もの「鯉」の語が見られます。

次の例は、源正頼の屋敷の釣殿で行われた納涼の宴のさまを描いたものです。正頼の屋敷は、『源氏物語』の六条の院と同じように四町を占め

る屋敷で、ここは、その東北の町にあたります。

(正頼が)「女君たちも、出で立ち給へ」と聞こえ給へば、御車どもして、船編みて据ゑて、渡り給ひぬ。うなぬ・下仕へらは、さし続き、浮橋より渡る。母屋に、御簾懸け、御几帳立て渡して、君たちおはします。實子に、上達部・親王たちおはしまして、女君たち御琴ども掻き合はせ、男君たち笛ども吹き合はせ、琵琶・御琴、磬打たせ、呂の声に合はせて遊ばし、御前の池に、網下ろし、鵜下ろして、鯉・鮒取らせ、よき菱・大きな水落取り出でさせ、敵しき山桃・姫桃など、中島より取り出でて、をかしき胡瓶ども、水に拾ひ立てなどして、涼み遊び給ひて、あるじのおとど(正頼)、「今日、ここに、この好き者ども、一人もなき、さうさうしや。仲澄は、藤侍従(藤原仲忠)呼びに遣れかし。深き契りある人は、由ある折を過ぐさぬぞよき」などのたまへば、驚きて、のたまひ遣はしたれば、三所(藤原仲忠・源仲頼・良岑行正)ながら、遊び人と出で来て、船に乗りて、釣殿へまうづ。

(祭の使、二二五ページ)

一般的な寝殿造りの図では、寝殿を中心に、北に北の対、東に東の対、西に西の対という対の屋があり、その東の対や、西の対から南に廊が伸びていて、南にある池に接した所に釣殿があることになっていますが、『うつほ物語』のこの正頼邸の東北の町の釣殿は、池の中島に造られていて、女君たちは、舟を結び合わせて、その上に車を乗せて釣殿に渡っています(4)。「うなぬ・下仕へ」などの侍女たちは、舟の上に板を渡した浮橋を渡って、この釣殿に来ています。あとで呼び出された藤原仲忠たち

は、船に乗って釣殿を訪れます。このような、廊と切り離された釣殿はあまり例がなく、実際の寝殿造りでは、治安元年(一〇二二)に造られた藤原頼通の高陽院の釣殿が最初の例で、これは『うつほ物語』の正頼邸のこの釣殿に着想を得たのではないかと言われています(5)。この釣殿で、正頼は、上達部や親王たちを集めて、納涼の宴を催します。宴では、女君の弾く琴と、男君たちの吹く笛の演奏があり、衆人たちの琵琶や箏の琴、磬(中国伝来の打楽器)などがそれに合わせて演奏され、池で、網や鵜飼いによつて鯉や鮒を捕り、菱や水落(鬼蓮)を採取し、中島からは山桃や姫桃という果物を採らせたりして、人々をもてなしました。鵜飼いといえは、現在では長良川の鵜飼が有名ですが、貴族の寝殿造りの池でも行われたことがわかります。これは、今で言えば、生け簀料理とでも言うべきもので、最高のもてなしたたのでしよう。

また、鯉は、産養の際の贈答品としてしばしば贈られたようです。次の例は、源涼の子供が生まれた後の産養の記事です。

しばしあれば、紀伊守(神南備種松)、国の司たちのらうに率ゐて、物奉る。苞直一つ、鮭とを一つにつけたり。鰯十捧、二つを一つにつけたり。雉子十捧、三つを一枝につけたり。鳩十捧、二つを二捧にしたり。白銀のすふたつ二つ、蜜と甘露と入れたり。東の渡殿に持て運ねて、並み立てり。

(蔵開・下、五七九ページ)

この鯉や雉を贈った紀伊守は、源涼の祖父です。産養とは、誕生した子

供の無事に成長することを祈って、誕生後、三日、五日、七日、または九

日に行われた儀式で、鯉が産養の際に贈られたのは、前に見た『飲食事典』に、「産婦に与えると、乳の出がよくなる」とあったこととも無関係ではないでしょう。ここは、生まれた子供にというよりも、出産を無事にすませた母親に食べさせるために贈られたものではないかと思えます。もつとも、この鯉や鯛は、後に、「鯉・鯛は、生きて働くやうにて、同じ作り枝につけたり」(蔵開・下、五八五ページ)とあって、作り物であったことがわかります。仲忠と女一の宮との間に娘いぬ宮が誕生した際の七日の産養の日にも、藤壺(あて宮)から、白銀の鯉や白銀の鯛の作り物が贈られています(蔵開・上、四八三〜四八四ページ)。

いぬ宮の九日の産養の日には、仲忠の妹である梨壺からも、さまざまな贈り物とともに、白銀の鯉が贈られました。

また、春宮に候ひ給ふ中納言の妹(梨壺)のもとよりも、一斗ばかりの金の瓶二つに、一つには蜜、一つには甘葛入れて、黄ばみたる色紙覆ひて、担ひて、二尺ばかりの白銀の鯉二つ、生きてるやうに作りなしたり。紅葉の作り枝につけたり。紺瑠璃の大きやかなる餌袋二つに、白銀の銭一餌袋に、黒方を日乾しのやうにしなして一餌袋、沈を小鳥のやうに作りなして一餌袋、鳥の毛を剥ぎ集めて、青き薄様一重つつ覆ひて結ひたり。

(蔵開・上、四九六ページ)

この鯉も、「生きてるやうに作りなしたり」とあるように、まるで生きてい

るかのように精巧に作られたものです。

産養で贈られた贈り物は、産養が終わると、子供の誕生を祝ってくれた人々に、お礼としてプレゼントする習慣もありました。梨壺から贈られた鯉は、女一の宮の母仁寿殿の女御から、女一の宮の父、すなわち、いぬ宮の祖父にあたる朱雀帝に、藤壺から贈られた「白銀の雉」などとともに、駈負の乳母という人を通して贈られています。次は、その贈り物を朱雀帝が見た時の記事です。

かくて、奉れ給へる物、御文など、持て参りて御覽せさすれば、上(朱雀帝)御覽じて、「わざと麗しくしたりける物どもかな。駈負が語りつらむは、何ごとぞ」とのたまふ。「この、鯉を押し寄せて切りて侍りつる物なんどぞ、これかれに賜ひつる」と申す。「いとさまざまにをかしくしたりける物どもかな」とのたまひて、餌袋は、後の宮に、「女一の宮の残り物」とてもし給へるなり」とて奉れ給ひつ。鯉・雉などは、この頃、子生み給へる、時の更衣の御もどに奉り給へり。

(蔵開・上、五〇六ページ)

鯉と雉は、朱雀帝から、さらに、帝の寵愛を受けて、皇子を生んだばかりの更衣のもとへと贈られました。もとより白銀の作り物の鯉と雉ですから、どちらも実際に食べるわけではありませんが、無事に出産した女一の宮にあやかると贈られたものです。

最初に、『徒然草』の記事から、兼好が言う鯉の特徴として、栄養価が高

く、尊重すべき魚だということになると述べましたが、『うつほ物語』に描かれた「鯉」も、同じようにまとめることができません。

朱雀帝は、仁寿殿の女御に、お礼の手紙を書きます。次の歌は、その手紙に書き添えられた歌です。

よそながら中淀みする淀川にありけるこひを一人見るかな

この歌は、「こひ」に「鯉」と「恋」を掛けて、「中淀みする淀川」に、女一の宮の出産のために退出したまま宮中になかなか戻って来ない女御をたとえた歌です。このように、鯉は、「恋」の掛詞としても用いられました。

次の例は、仲忠が、まだ春宮に入内する前にあて宮に求婚歌を贈った場面です。

泣く泣く、夜一夜物語し明かして、つとめて、黒方に、白銀の鯉くはせて、

その鯉に、かく書きつけて奉れたり。

夜もすがら我浮かみつる涙川尽きせずこひのあるぞわびしき

とて奉れたり。

あて宮、物ものたまはず。孫王の君、「この度は、なほのたまはせよ。殊に物ものたまはず、静かなる人の、心魂もなく泣き惑ひ給へば、いとほしくなむ」と聞こゆれば、「聞きにくきこと出で来ば、君の御罪になさむ」とて、白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ、書きつけて遣はす。

川の瀬に浮かべるおのが篝火の影をやおのがこひと見つらむ

なごのたまぢ。

(祭の使、二三七ページ)

「黒方」は、沈香や丁子などを練り合わせた薫物の名です。仲忠は、黒方を夜の川に見立てて、その上に白銀の鯉を泳がせるように配して、その鯉に歌を書きつけてあて宮に贈ります。「夜もすがら我浮かみつる涙川尽きせずこひのあるぞわびしき」の歌も、「こひ」に、「鯉」と「恋」を掛けたもので、一晚中涙の川に浮かんでいるような私ですが、その涙の川に鯉が泳いでいるように、私の恋の思いがいつまでも尽きることはないことがつらいのですといった内容です。この歌にあて宮が返した「川の瀬に浮かべるおのが篝火の影をやおのがこひと見つらむ」の歌は、川の瀬に浮かんだ、自分自身の篝火の影を、魚の鯉ならぬ自分の恋だと思っただけなのでしょうと言つて、切り返したものです。

「鯉」と「恋」を掛けた歌は、『うつほ物語』以外では、ほかに、『大和物語』の第一三八段にも例が見えます。

こやくしくそといひける人、ある人を呼ばひておこせたりける、

隠れ沼の底の下草水隠れて知られぬこひは苦しかりけり

返し、女、

みかくれに隠るばかりの下草は長からじとも思ほゆるかな

この、こやくしといひける人は、丈なむいと短かかりける。

(『大和物語』第一三八段(6))

「こやくしくそ」とは、男性の名で、後に「こやくし」ともあるのです。「くそ」は名前につける接尾語だと考えられます。この「こやくし」は、背丈

が低い人でした。この「こやくし」が、ある女性に歌を贈ります。「隠れ沼

の底の下草みがくられて知られぬこひは苦しかりけり」の歌の「こひ」も、

「鯉」と「恋」が掛けられて、草に覆われた沼の底の下の水草に隠れて見

えない鯉のように、あなたに私の恋の思いが知ってもらえずにつらいとい

った意味になると思います。少し歯切れの悪い言い方をしたのは、今テキ

ストとした、新編日本古典文学全集では、この「こひ」の掛詞を認めてい

ないからです。『大和物語』の注釈書をいくつか見てみましたが、「鯉」と

「恋」の掛詞を認めるものと認めないものがあります。

この贈答は、『伊勢集』にも、どういうわけか、藤原仲平と伊勢の贈答と

して見られるのですが、近年出版された二つの『伊勢集』の注釈書でも、

この掛詞は認められていません。『大和物語』とそう違わない頃に成立した

『古今和歌六帖』という歌集には、魚の「鯉」の歌題で、次の二首の歌が

載せられています。

行く水の下なるこひの苦しきは網のひとめを憤むなりけり

〔古今和歌六帖〕第三、一五二四<sup>(ア)</sup>

淀川の底にすまねどこひといへばすべていをこそ寝られざりけれ

〔古今和歌六帖〕第三、一五二五<sup>(イ)</sup>

どぎざらも「こひ」に、「鯉」と「恋」を掛けた歌です。まだ、一般的に認知

されていないようですが、魚の「鯉」は、同じ音の「恋」と結びつくことで、

ようやく歌言葉の一員としてほんの末席に登録されることになる言葉だと

思います。

○

「雉」の語は、『源氏物語』には二例、『うつほ物語』には、「雉子」「雉子

」雉の足「雉の皮」「雉の嘴」を含めて、一二例見ることが出来ます。

『源氏物語』の例は、「行幸」の巻の、大原野行幸の際に、物忌みを理由

に参加しなかつた太政大臣光源氏のもとに、冷泉帝が雉一枝を贈つた例で

す。

かうて野におはしまし着きて、御輿とどめ、上達部の平張に物参り、御装束

束ども、直衣、狩の装ひなどに改めたまふほどに、六条の院より、大御酒

御果物など奉らせたまへり。今日仕うまつりたまふべく、かねて御気色あり

けれど、御物忌みのよしを奏せさせたまへりけるなりけり。藏人の左衛門尉

を御使にて、雉一枝奉らせたまふ。仰せ言には何とかや、さやうの折のこと

まねふに、わづらはしくなむ。

雪深き小塩の山に立つ雉の古き跡をも今日は尋ねよ  
太政大臣の、かかる野の行幸に仕うまつりたまへるためしなどやありけむ、  
大臣、御使をかしくまりもてなさせたまふ。

小塩山みゆき積もれる松原に今日ばかりなる跡やならむ  
と、そのころほひ聞きしことの、側々思ひ出でらるるは、僻ことにやあらむ。

〔源氏物語〕「行幸」の巻<sup>(ウ)</sup>

冷泉帝の「雪深き」の歌の「雪深き小塩の山に立つ雉の」までは序詞で、

「古き跡」は、雉の足跡の意味と、故実先例の意味を掛けて、光孝天皇の

芹川行幸に太政大臣藤原基経が供奉した先例があるのに、どうして今日はこの大原野行幸について来てくれなかつたのかという歌です。この例は、食品とされた例ではありませんが、雉は、天皇から太政大臣に贈られるのにもふさわしいものでした。

『大鏡』の基経伝には、この光孝天皇と基経にまつわる、次のようなエピソードもあります。

小松の帝(光孝天皇)の御母、この大臣(基経)の御母、はらからにおはします。さて、兎より小松の帝をば親しく見たてまつらせたまうけるに、事につれ、景迹におはします。「あはれ君かな」と見たてまつらせたまひけるが、良房の大臣の大饗にや、昔は親王たち必ず大饗につかされたまふことにて、渡らせたまへるに、雉の足は必ず大饗に盛る物にてはべるを、いかがしけむ、尊者の御前に取り落としてけり。陪膳の、親王(光孝天皇)の御前を取りて、惑ひて、尊者の御前に据うるを、いかが思し召しけむ、御前の大殿油をやを、らかい消たせたまふ。

(『大鏡』太政大臣基経)

「大饗」は、大臣に任じられた時、あるいは、その後、毎年正月に大臣家で行われる饗宴で、臣下の饗宴としては最も重要な饗宴です。基経の父良房の大饗の時、尊者(主賓)の前に盛る雉の足を陪膳の者がうっかり落としてしまい、慌てて、当時親王として出席した光孝天皇の御前の物を取った明かりを消して、陪膳の者の失態をかばったといひます。基経は、光

孝天皇の従兄弟にあたるのですが、この大饗に参加していて、この親王のとつさの機転に感心して、後に、陽成天皇の退位の後の天皇に、みずから天皇になるうとした源融を退けて、光孝天皇が次の天皇になる道を開いたと語られています。大臣大饗のような饗宴で食べられるのも、雉でした。

この「雉の足」とは、雉のもも肉のことだと思ひます。「雉の足」の例は、『うつほ物語』にも一例見えます。「蔵開・中」の巻で、仲忠が、朱雀帝に、父祖伝来の書籍を講書するために参内した時のことです。講書を一時中断して、人々が殿上の間でくつろいでいる時に、今では春宮妃となつた藤壺(あて宮)のもとから、さまざまな食べ物が贈られました。その中に、若菜の羹とともに、「雉の足」が器に高く盛られていました(蔵開・中、五四五〜五四六ページ)。この「雉の足」も、宮中で、殿上の間でくつろぐ人々に、春宮妃から贈られたものですから、やはり、高級な食べ物だつたと考えられます。

雉も、鯉と同じように、産養の際の贈答品として贈られました。いぬ宮の七日の産養の日には、藤壺から「白銀の雉二つ、腹に龍腦込めて、雉の皮をはぎて、大いなる松の作り枝につけて」(蔵開・上、四八二ページ)贈られ、源涼の子供が生まれた後の産養の日には、紀伊守から、「鯉十捧」とともに、「雉十捧」が贈られています(蔵開・下、五七九ページ)。いずれも作り物の例ですが、『食品国歌』に、「雉の肉中温めて氣をば増し、瀉利をとどめて瘰を除くぞ」とあつたように、言わば、健康食品として、鯉と同じように産養の品として贈られるのにふさわしいものだつたと考えら

れます。

次に、あて宮の求婚者の一人であった源仲頼にまつわるエピソードを紹介したいと思います。仲頼は、左大臣の次男で、父親はすでに亡くなっています。音楽の才にすぐれ、多くの人々から婿にと望まれながら、「天女以外には自分の妻となる女性はいない」と思って、結婚することなく過ごしてきた人物です。この仲頼も、才色兼備で名高い宮内卿在原忠保の娘によくやく婿取られ、愛し合うようになります。仲頼と忠保の娘との仲は、「この娘に婿取りつるに、思ふと言へば疎かなり。会はせし夜より、搔いつきて、あはれにいみじき契りせず。片時ほかに泊まることなく、まれに内裏に参りては、すなはち急ぎまかでつつ、例ありしやうに宮仕へもせず、限りなく思ふ」(嵯峨の院、一九一ページ)とまで語られています。このように夫婦幸せに暮らしていた仲頼も、正頼邸で行われた賭弓の選擧で、あて宮を垣間見てしまったことで、人生を狂わされることとなります。

仲頼は、正頼の家から婚家に帰ってきて、そのまま、五、六日寝込んでしまいます。仲頼が正頼邸で見たあて宮の姿は、「天女下りたるやうなる人」と評されています。「天女以外には自分の妻となる女性はいない」と思っていた仲頼にとつて、まさに理想とすべき女性でした。あて宮を見てしまったことによつて、あれほど愛し合っていた妻のことも、何とも思えなくなつてしまいます。物語は、「になくめでたし」と思ひし妻も、物ともおぼえず、片時も見ねば、恋しく悲しく思ひしも、前に向かひ居たれども目にも立たず」(嵯峨の院、一九三ページ)と語っています。夫の異変を敏

感に感じ取つた妻は、夫には、誰か心に思う人ができたのだろうと察して、両親の部屋に行つて籠つてしまいますが、娘のことを案じた母は、夫仲頼のもとに戻るよう説得して、娘を戻します。次の引用文は、その翌日のことで、心配した「父ぬし」在原忠保が、婿仲頼のもとを訪れた場面です。

つとめて、父ぬし(在原忠保)、少将(源仲頼)の方にまうで給ひて、「いかに、かく籠りおはします。つきなくも思ほさるらむ。忠保、心ざし深けれど、いとあやしくのみ侍りて、しるしなきことをかしまり申し侍り」。少将、「あなかしこ。何か。つきなきことも侍らず。日ごろ、乱り心地の、例にも似ず侍れば、内の方にも参らで、籠り侍るなり」。などか、さはおはしますらむ。少将、「知らず。この左大将殿(源正頼)の櫻に参りて侍りしに、宮の、かはらけ取り給ひて、いみじく強ひ給ひしかば、期もなく食へ酔ひにける名残りにや侍らむ」。いと不便なることかな。すべて、この御酒間こし召し過ぐることこそ、いと悪しきことなれ。少将、「いかで、この官まかり離れなむ。すずるなる酒飲みは、衛府司のするわざなりけり」と言ふ。父ぬし、内に入りて、「君は、この頃悩み給ふことありけり。何ごとをか仕まつらむ。いとほしく」など言ふを、この女、例ならぬ気色を見て、「いと心愛し」と思ひて、前なる硯に、手習ひをして、かく書きつく。

この世にはつらき心も知り果てぬ契りし後の世をも見てしかと書きて、押しわごみて置いたるを見て、「あはれ」と思ふ。「わが心とも言はじ、あぢきなきを見て、えあるまじきことを思ひて、人にも、「つらし」と思はるること。いかばかり思ひし人にもあらなくに」と思ふにも、あはれなりければ、「昔より契りし深き仲なれば生きも死にをもとにこそせめなほ、心地の、例ならず悩ましければそや。御ために疎かなるには、なとてかあらむ」な



と言ひて、もろともに臥しぬ。

(嵯峨の院、一九六―一九七ページ)

この場面は、仲頼のもとにやって来た舅忠保の発言から始まります。忠保は、正頼邸から帰つてきてからずっと籠つている仲頼のことを案じて、「どうして、こんなふうには部屋に閉じ籠つていらつしやるのですか。何か不愉快なことでもおありなのでしょう。私は、婿君を大切に思う気持ち強いのですけれど、とても貧しくて、婿君への心ざしをはっきりと示すことのできるような、食べ物や衣装などを充分にご用意できないことを、とても申しわけなく思っています」と言います。仲頼は、「恐縮です。何でもないのです。不愉快に思っていることなどありません。ここ数日、普段と違つて、気分がすぐれないので、ご挨拶にも伺わずに籠っているだけです」と答えます。次の「なか、さはおはしますらむ」は、忠保の発言で、「どうしてご気分がすぐれなくなつておしまいになつたのでしょうか」という意味です。仲頼は、さらに、「わかりません。先日、左大将正頼殿の饗宴に参上した時に、宮さまが、杯をお持ちになつて、私にむりやり飲むようにお勧めになつたので、際限なく飲んで酔つてしまつたせいでしょう」と言つて、舅を安心させるために、強度の二日酔い、もう七日酔いということになりますが、酒に酔つたせいだと答えます。

忠保は、この仲頼の言葉を信じたようです。「とても困つたことですね。まったく、お酒を飲み過ぎることは、いけないことです」と言つて心配し

ます。仲頼は、「もう、この近衛の少将という官職をやめてしまいたいです。おやみに酒を飲むのは、衛府司がすることです」と答えます。この発言は「衛府司」の「ゑふ」に酒を飲んで酔うの「ゑふ」を掛けた洒落で、『うつほ物語』には、ほかにも見えるのですが、まだほかの作品では見たことがない表現です。こんな洒落を織り交ぜながら会話を生き生きと描くのがこの物語の特徴です。

忠保は、自分の妻のもとに戻つて、「婿君は、ここ何日か気分がすぐれずいらつしやるそう。どんなお世話をしてさしあげたらいいのだろうか。お気の毒に」などと言つて相談します。次の「この女」というのは、仲頼の妻です。強度の二日酔いで気分がすぐれないという仲頼の発言を信じた忠保と違い、妻は、いつもと違う夫の様子を見て、「とてもつらい」と思つて、前にあつた硯で、手習いのように、書くともなく書きつけます。

『源氏物語』には、その時の思いを、書くともなく書きつけた手習いの歌が数多くあり、特に、浮舟という女君が人に訴えることのできない思いを手習い歌に書きつけることが特徴になつていて、「手習」の名の巻まであるのですが、『うつほ物語』では、手習い歌は、この一首だけです。歌の意味は、「この世では、夫の冷淡な心もすっかりわかつた。この世ならず、後の世でも夫婦でいようと、あの人が約束したその後の世ではどうなのかを見てみたい」という意味で、夫の愛情の衰えを感じ取つて嘆いた歌です。

妻は、こう書きつけた紙を丸めて夫仲頼に見られないようにしようと思いますが、仲頼は、すばやくそれを見て、「恋をしても手の届かない人を見

て、分不相応な思いを抱いて、妻にも、『冷淡だ』と思われるのは、私の本意ではない。この妻のことを、自分はどれほど愛してきたことか」と、妻のことを気の毒に思い、妻に歌を返します。仲頼の歌は、「昔から後の世までもと約束した深い夫婦の仲なのだから、生きるのも死ぬのも一緒に」と、心変わりがないことを歌ったものです。

仲頼は、「気分がすぐれないからで、あなたに対する愛情が薄れたわけでは、けつしてない」と、再度言いますが、もちろん本心ではなく、仲頼は、このまま、あて宮への思いを抱き続け、後に、あて宮が春宮と結婚したことを知って、世をはかなんで出家してしまいます。

物語は、この後に、「絵解」といわれている部分で、この時のできごとを、ふたたび、

「母・子居て、「物参らむ」とて、調じ急ぐ。父ぬし、手づから雉作る。

ここには、少将に物参る。娘、雉などあり。」

(嵯峨の院、九七ページ)

と語っています。この「絵解」といわれている部分も、『うつほ物語』の文体の特徴の一つなのですが、このことについては、今回の話の本筋からはずれませんので、これ以上深入りすることはやめておきます(10)。前に、忠保が、「君は、この頃悩み給ふことありけり。何ごとをか仕まつらむ」と言っていた部分を、具体的に描いた部分だということだけ確認しておきたい

と思います。忠保が、「婿君は、ここ何日か気分がすぐれずにいらっしゃるそうだ。どんなお世話をしてさしあげたらいいのだろうか」と言って妻と相談して、仲頼に食べさせるために雉をみずから料理しているのです。病の後に、米糞のあるものを食べさせるのは、現在でもあることで、ここでは、それに雉が選ばれたことになりました。ただし、雉というのは、これまで見てきたように、かなり高価なもので、そう簡単には手に入らなかつたのではないかと考えられます。

忠保は、仲頼に、「私は、婿君を大切に思う気持ちは強いのですが、とても貧しくて、婿君への心ざしをはつきりと示すことのできるような、食べ物や衣装などを充分にご用意できないことを、とても申しわけなく思っています」と言っていました。忠保は、物語に最初に紹介される時も、「もともと財力がなく貧しい人で、利得のない宮内卿という官について、年月がたったので、家計もとても貧しい」と紹介されていました(嵯峨の院、一九〇ページ)。

忠保の貧しさは、物語の別の箇所でも語られています。仲頼が、紀伊国の吹上の浜に、源涼のもとを訪れる場面では、仲頼のために用意してある御佩刀(武官が束帯姿の時に身につける太刀)を質に、錢十五貫を借りて、隨身や、旅先での食事の用意をしています(吹上・上、二四八ページ)。仲頼たちが紀伊国から帰ってきた時にも、食事の場面が描かれています。

かくて、四月四日ばかり、夜更けてなむ、宮内御殿におはし落ちたりける。

宮内卿のぬし、御饗よろしうし給へり。君たちには、黒柿の机二つ、薄物の表、将監どもには、朴の木の机賜ひて、よろしき饗し給ふ。

(吹上・上、二七二～二七三ページ)

忠保が用意した食事は、「よろしうし給へり」とあるように、それなりのものだったと語られています。ここにもまた、食べ物によって婿をいたわる舅の姿が描かれています。忠保が婿のために用意した雉も、かなりむりをして調達したものであったでしょう。それが、「父ぬし、手づから雉作る」の背景にあることとなります。言葉を尽くして婿を大切にしていると言うよりも、雉をみずから料理して食べさせると言う行為、雉という食材が、忠保の婿に対する思いを、強く表現していることとなります。

平安時代のさまざまな作品の中で、『うつほ物語』は、さまざまな〈物〉を書くこと、〈物〉で表現することにこだわったためずらしい作品です。〈物〉を描くことで表現するということを、方法として自覚的に選び取った作品ではなかったかと思われます。飲食の表現によっても、それを知ることができるのです。

※本稿は、本学大学院のオムニバスの授業「文学と食」で講義した内容をまとめ直したものである。

(注)

- 1 『徒然草』の本文の引用は、久保田淳ほか校注『方丈記 徒然草』(新日本古典文学大系 岩波書店 一九八九年一月)により、適宜、表記を改めた。
- 2 本山荻舟『飲食事典』(平凡社 一九五八年二月)。
- 3 『うつほ物語』の本文の引用は、室城秀之『うつほ物語 全 改訂版』(おうふう 二〇〇一年一〇月)による。
- 4 室城秀之『うつほ物語』の三条院について『源氏物語』の六条院との比較を通して『(論集平安文学5『平安文学の想像力』 勉誠出版 二〇〇〇年五月) 参照。
- 5 太田静六『寝殿造の研究』(吉川弘文館 一九八七年二月)。
- 6 『大和物語』の本文の引用は、高橋正治ほか校注『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(新編日本古典文学全集 小学館 一九九四年二月)により、適宜、表記を改めた。
- 7 『古今和歌六帖』の本文の引用は、『古今和調六帖(上)』(細川家永青文庫叢刊 2 汲古書院 一九八二年一月)により、適宜、表記を改めた。
- 8 『源氏物語』の本文の引用は、柳井滋・室伏信助ほか校注『源氏物語 三』(新日本古典文学大系 岩波書店 一九九五年三月)により、適宜、表記を改めた。
- 9 『大鏡』の本文の引用は、橋健二・加藤静子校注『大鏡』(新編日本古典文学全集 小学館 一九九六年六月)により、適宜、表記を改めた。
- 10 『うつほ物語』の「絵解」については、室城秀之『うつほ物語の表現と論理』(若草書房 一九九六年二月) 参照。